

木田秀次理事長のご逝去を悼む

「天気」53巻12号で報じられたように、木田秀次第34期理事長（京都大学名誉教授）は、去る2006年11月13日に急逝された。数年前から肝臓に少し問題を抱えられているとはうかがっており、毎年1回、夏休みの時期に定期的な検査入院をされていた。しかし、昨年7月に第34期理事長をお引き受けになるときも、そのことで特に不安を感じていらっしやる様子は全くなく、若手研究者の育成や地球惑星科学連合への積極的な寄与など学会が抱える多くの課題に意欲的に取り組もうとなさっていただけない、ご自身も大変心残りであったことと思う（「天気」53巻7号の新理事長挨拶参照）。病を押して出席された秋季大会の授賞式でお会いしたのが、お話しすることのできた最後となった。こんなに早く旅立たれるのであったならば、もっといろいろと学会の抱える諸課題に関するお考えをうかがっておけばよかったと今更ながら残念でならない。

以下では、身の程をわきまえず、木田さんとお呼びすることをお許し願いたい。木田さんは、理事長になられた際にも、わざわざ理事会のメンバーにそう呼んでほしいと呼びかけられた。それは、理事長になっても同じ目線の高さで理事や会員の方とおつきあいをしたいという木田さんの強い意志の表れであった。この拙文でそうお呼びすることも、きっとあの世で喜んで下さっていることと思う。

木田さんは、1969年に東京大学理学部をご卒業後、修士課程に進まれ、故関口理郎先生のご指導のもと、大気オゾンの解析に関する修士論文を完成されて、博士課程に進まれた。博士課程の単位を取得された後、1974年には気象研究所予報研究部研究官に着任され、1975年には岸保勤三郎・松野太郎両先生のご指導のもと「大気輸送に関する研究」で理学博士を取得された。その後、気象研究所気候研究部主任研究官、気象庁数値予報課数値予報班長、気象研究所応用気象研究部室長などを歴任されたほか、米国航空宇宙局エイムズ研究センター、米国プリンストン大学地球流体力学研究所などで延べ4年にわたって研究された。1993年5月には京都大学理学部・教授（1994年4月より同大



学院理学研究科・教授）に異動されて2006年3月定年退職されるまでその職を務められた。この間、1985年度には「大気大循環モデルによる物質輸送の研究」により日本気象学会賞を受賞されたほか、30編を越える原著論文、7編の著書（共同執筆を含む）、20編を越える解説・報告を著された。また、京都大学においては多数の大学院生を指導され、多くの若手研究者を世に送り出された。

日本学術会議においては、第17期気象学連絡委員会幹事、第18期同委員会委員長、第19期大気・水圏科学研究連絡委員会気象学専門委員会委員長を務められ、「気象学の研究・教育の状況と展望」と題する大部の対外報告をまとめられた（「天気」53巻3号）。同時に5年にわたってIAMAS（国際気象学・大気科学協会）のNational Delegateを務められ、IUGG2003札幌大会では組織委員会委員としても活躍された。

木田さんは、私にとっては大学院の大先輩で、気象研究所でも一緒にいた時期があったが、研究部が異なったこともあり残念ながらあまり親しくお付き合いさせていただく機会を得ることがなかった。木田さんと親しくさせていただく機会を得たのは、10年前に第29期理事を務めさせていただくようになってからである。木田さんはそのとき既に8年の理事の経験をお持ちであった。第29期以降33期理事会までは、主として総合計画を担当され、定款の変更に関わる文部省（文

部科学省)との骨の折れる折衝、会員制度の改革、気象技術講習会・気象カレッジの立ち上げなど、学会理事として最も負担の多い仕事の数々を遂行された。新参者の理事としては、これまで様々な形で学会の恩恵を受けてきていながら、学会にこのように大変な仕事をされている理事の方がいらっしゃることなど全く思い及ばなかったことを大変恥ずかしく思ったものである。その一方、木田さんだけがなぜお一人でこれほどの負担を背負われなければならないのか不思議に思ったものである。

その疑問の一部が、昨年京都大学を定年退職されてしばらくしてからいただいた私的なメールで少し解けた気がした。木田さんは高校時代に結核を患われ、4年近くも入院生活を送られたそうである。このため、片側の肺の機能が十分でなく、体には常に不安を感じられていたとのことであった。ご自身の言葉によれば、「実は本来は皆の先頭に立って旗振りをするのは好きな性格なのだけれども、大きなプロジェクトを抱えて途中で体を悪くすると多くの方に迷惑がかかるので、そのようなことは避けてきた。しかし、学会の仕事であれば、体を悪くしても代わりは見つかるので、黒子に徹するようにしてきた。」とのことであった。しかし、この10年間、学会で最も負担のかかる仕事を黙々と担当されてきたことが、急激に体調を崩されたことと無関係であったとは思えない気がする。いずれにしても、木田さんの存在なくしては今日の気象学会の姿が無かったことは確かである。

木田さんは、物事を非常に深く考えられる方であったが、一旦決断されると、果敢に実行に移される行動力の持ち主でもあった。その良い例が電子レター誌 SOLA の創刊である。2003年春に電子レター誌検討小委員会を立ち上げられると、同年秋の全国理事会で

電子レター誌発刊の方針の了解を取り付け、2005年1月には予定通り創刊を実現された。もちろんこれには、田中 博編集委員長や三上正男編集事務局長の優れた能力によるところも大きい。しかし、適切な人材を適切な場所に集めて新たな事業を展開する行動力には頭が下がる思いがした。ちなみに、SOLA (Scientific Online Letters on the Atmosphere) は木田さんの考案された誌名である。

木田さんは、特定の個人や組織の利益に偏らない、すべての学会員に公平な気象学会の運営を第一に考えてこられた。この運営方針は、今後気象学会にどのような展開があろうとも、種々の決断を下す際の基本として理事一同で肝に銘じておきたいと思う。

木田さんが京都大学を定年になられた際に下さった挨拶状には、「今後は京都の風水(ふうすい)の研究のため、数値モデル「風水」を開発し、局地気象や局地気候の勉強をしようと思っており、また道元の著作を読みながら、その思想の最高峰をゆっくりと登ってみたい」とあった。そういえば、木田さんとの会話には禅問答のようなやりとりが少なくなかったような気がする。性急に答えを求める我々に対して、飄々とした笑顔で、はるか高いところから世の中を見渡されていたような。そんなお答えがうかがえなくなったことはこの上なく寂しいが、木田さんならこんなときどうお答えになるだろうか、という問いを知らず知らずのうちに私たちの心の中に残して下さったことは、残された私たちの大きな財産であると思う。どうか、あの世から今後の日本気象学会の発展を見守っていただきたい。

会員一同、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(理事長代理 新野 宏)